『海嶺』論　Ⅱ　―神に出会う旅

森下辰衛

『海嶺』は旅の物語である。宝順丸が嵐に遭って漂流を始めて以降、それは祖国を目指す旅の物語である。すなわち、あるべきところ、ふるさとへ帰ろうとするための旅である。そしてそれは苦難に満ちた旅である。日本が試され、人間が試される旅、過酷な運命の中で人生の意味が問われる旅であったが、それは結果、自分自身と神に出会う旅でもあった。そしてその出会いのときには再び「如何に生きるべきか」が問われ、それぞれの人生の旅が祖国を超えた真の故郷への途上にあることが発見されることになる。

この小説のテーマのひとつは、徳川時代後期の無学な庶民であった三人の船乗りたちがどのように神に出会ってゆくかということを描くことであった。彼らが庶民の言葉で神について思索し、庶民の心で神を求め、神に出会ってゆく過程、神に出会わざるを得ないことを描こうとするのが、この旅の物語が書かれる意味であった。

一、捨て子としての岩松　―棄てぬ者を探す道程

愛知県知多郡美浜町小野浦の良参寺の過去帳および墓所の墓石に宝順丸の乗組員たちの名が書かれている。過去帳では「十月十一日志州鳥羽浦出船没所相不知」という朱書きの後に十四人の戒名と俗名、出身地、親の名が書かれている。漂流を生きのびた宝順丸の三人のうち、音吉、久吉は小野浦の生れで、「武右衛門伜乙吉」「又平伜久吉」と記されているが、岩松に関しては「宮宿」（現名古屋市熱田区）という居住地名しか明らかにされていない。音吉、久吉はその親族関係や子孫などもかなり明らかになっており、一九六一年の三吉の「頌徳記念碑」建立の記念式典にも親族関係者の子孫が出席していたが、[注1] 岩松に関しては『米船モリソン号渡来の研究』[注2]においてキングの航海日誌の中にある記述として小野浦出身で宮（すなわち熱田）に妻子を残してきたことがわずかに出てくるとされているだけで、親の名などは不明ある。

音吉は「乙吉」と記された資料も多いが三浦綾子は「音吉」を選んでいる。勿論「音吉」の方がより一般的であるからであろうが、「音吉」は彼らが翻訳を手伝った「ヨハネ福音書」の「福音」という言葉と近い響きを持つからもあるのではないだろうか。岩松は英国外務省に残る文書には「イワキチ」とあり、漂流後ロンドンまでのいずれかの時期に岩松から岩吉に改名したことが窺える。三浦綾子の物語はこの事情にしたがっている。

作家はこの三人のうちの最年長で、リーダー的存在であったと考えられる岩松を、物語の重要人物として造型して行く中で、不明であったその出自のところを、熱田神宮で拾われた〈捨て子〉として設定した。

三浦文学においては処女作『氷点』でも、陽子、啓造、北原、佐石といった重要人物の何人かが、親の失われている人物として設定されている。『天北原野』の孝介の父は物語の始めの方で放火と左遷によって言わば非業の死を遂げている。『泥流地帯』では主人公の拓一と耕作の父義平は数年前に冬山造材の事故で亡くなっており、その頃から拓一は夜の闇を恐れるようになったとある。『積木の箱』では主人公久代が経理係の父のために七十万の金と引き換えに凌辱を受けて帰宅したとき、父は既に縊死していた。久代はその運命の「果てしない宇宙に続いている」「のしかかるような闇をしっかりと受けとめて」ゆこうとしたと書かれている。

このように三浦文学では、父がいないか、もしくは物語の初期段階で姿を消すという設定がしばしばなされるが、これらはいずれも主人公たちを、「どう生きたらいいのか」という戸惑いに投げ込み、ひとりで運命に立ち向わせるための方策であったと考えられる。特に『積木の箱』『泥流地帯』そして『海嶺』では主人公は苦難の運命を象徴する夜の闇の前に独りで立つことになる。

夜空を仰いで、岩松は胴の間に突っ立っていた。天の川がぼおっと白砂を撒いたようだ。

「星屑か」岩松は吐き捨てるように呟き、しかし心の中では、

（星って一体なんだろう）

と思った。（略）空がのしかかるように、岩松の上にあった。（略）

岩松はふっと、熱田にいる妻の絹を思った。（略）

岩松は絹の母親かんの吊り上がった目を思い出す。かんに強いられて、絹は体を売っていた。絹が岩松から金を取らなくなった時、それを知った母親のかんが、絹の髪を手に巻いて引きずりまわした。（略）岩松はかっとしてかんの頭を殴りつけた。かんはその場にうずくまったが、その翌朝かんは死んでいた。医者は卒中だと言ったが、岩松は自分のこの手で殴り殺したのだと思っている。

「ふん、化けて出るんなら出てみろ」（略）

岩松は、自分がいつも何かに腹を立てているような気がした。かんの死に会ってから、こんな人間になったような気がする。（略）

「俺はな、熱田神社の境内に捨てられてあったんだ」（略）

岩松は、父の仁平と母の房の顔を胸に浮かべた。仁平夫婦には子供がなかった。瓦葺きの職人だった仁平は、仏の仁平と言われるほど柔和な男だ。その仁平が熱田神宮に朝早く詣でに行った。新しい仕事にかかる時、仁平は必ず神社に参詣に行く。そして松の根方で泣いていた捨て子の岩松を拾って、育ててくれたのだ。

（「開の口」）

天を仰ぐ岩松の視線は、己が運命への眼差し、思い巡らしでもある。それは人生の意味への渇仰の姿である。

親が子の体を売るような非道に対して、岩松は強く憤る。彼自身親の愛が薄いがゆえに、親の愛は神聖なものであるべきものであったゆえに、絹の母かんの醜悪なエゴに対する憤りも烈しい。親という存在に与えられた子を愛する使命の聖性を冒涜するものとして怒るのである。しかし、そのような憎むべき者であっても自分が殺してしまったということへの罪責感は岩松の深い所にある。「いつも何かに腹を立てているような」とは、人間というものの罪業に対して、かんに対して、自分に対して、運命のようなものに対して、定まることの出来ない心、何か大きなものによって、大きな愛によってしっかりと捉えられなければ、定まることのない彷徨する心なのである。そしてその中心に捨て子であったという痛みを伴う自己認識がある。

それは彼の中の最も奥底にある問題であり古い傷口であった。作られ、捨てられて在るものとしての人間。拾い育ててくれた育ての親仁平夫婦の人間の愛とそれを支えている信仰の姿勢と、しかし人間の愛の限界と。岩松には、捨てない存在があるということを知ることへの渇くような希求がある。そして彼はこの物語の最後、生涯最悪の苦難の中、「砲火を吐きつづける暗闇」の前で、「決して捨てぬ者」に出会ってゆくことになる。

二、截断橋　―真実な心を求めること

この小説は、歴史的事件としての宝順丸の漂流やモリソン号事件を扱った多くの先行の文献に取材しながらも、そこから離れているところが幾つかある。その一つは宝順丸の出帆の二年前の「御蔭参り」の年から物語を語り始めていることであるが、これについては「『海嶺』論Ⅰ」[注3]で論じた。もう一つは、この出帆以前の物語の部分で、小野浦や熱田のことをかなり書いていることである。とくに岩松に関しては先にも書いたように、出自や家族などそのほとんどがフィクションであり、作家が熱田周辺を取材して得たものを使って物語を紡ぎ出しているようである。中でも截断橋に関わる故事はこの作品全体においてもかなり重要な部分として取り入れられている。

いつしか岩松は、截断橋のたもとに来ていた。截断橋は幅三間程の精進川にかかっていた。橋のたもとに、擬宝珠がある。孤独な思いになると、

岩松は子供の頃から、よくここへ来たものだ。そして擬宝珠に彫られた悲しい仮名文字を読む。それは、天正十八年に、わが子を合戦に失った母親が、この橋を建立して、わが子の菩提をとむらった時の言葉である。

〈天正十八年二月十八日に、小田原への御陣、堀尾金助と申す十八になりたる子を発たせてより、またふた目とも見ざる悲しさのあまりに、今この橋を架けるなり。母の身には落涙ともなり、即身成仏し給え。／逸岩世俊と後の世のまた後の世まで、この書きつけを見る人は、念仏し給えや。三十三年の供養なり〉

（略）三十三年の供養と書いてあるから、死んだ子が五十一になった年の言葉ではないか。とすればこの母は、とうに白髪の老婆の筈である。何と長い間、母親という者は悲しみを持って生きているものかと、生母を知らぬだけに岩松はその言葉が身に沁みるのだった。（略）

何を信ずることはできなくても、この截断橋を建立した母の心だけは、真実である。この橋の擬宝珠に彫られた言葉を岩松に教えてくれたのは、同じ長屋に住む占い師の男であった。（略）岩松が仮名を覚え、僅かでも漢字を覚えているのは、この占い師にかわいがられて、教えてもらったお蔭である。この占い師は岩松が千石船に乗ると言い出した時、何を思ったかこの橋につれて来て、これを読ませたのであった。（略）

「世には真実な心というものがあるものじゃ。求めていけば、いつかはその真実にめぐり会うものじゃ。岩松の今の父さま母さまも、この母の心と同じ心でお前を育てたのじゃ。それを決して忘れるまいぞ」

こう諭してくれたのであった。それが年を経るにつれ、岩松の心の底に深く沈んでいった。占い師はいつしか長屋を去ったが、その言葉だけは胸に残った。

（「截断橋」）

まず、「截断橋」の表記であるが、現地の石碑[注4]、『新編熱田裁断橋物語』[注5]、『堀尾金助と裁断橋』[注6]等の資料を見たが、「裁断橋」が一般で、『新編熱田裁断橋物語』によれば「裁談」など、ほかにも幾つかの表記があったようだが、管見に入る限り『海嶺』の「截」の字は一つも見出せない。上記の二冊の資料によれば、「裁断」は裁判のことで、熱田神宮の社人が社の掟に背くとここで裁判して、この橋を渡らせて東方へ追放したとのことである。これに対し、「截」は「断ち切る」意で、辞書を見ても「裁く」意はないようである。「截断」は普通「サイダン」でなく「セツダン」と読むので、作家は「裁きの橋」たる「裁断」橋ではなく、「断ち切られた橋」たる「截断」橋を意図しているのではないかと考えられる。それは堀尾金助母子の断ち切られた運命でもあるが、『海嶺』では漂流民たちと祖国との断ち切られた関係、そして神と人間との断ち切られた関係をも含意しているであろう。さらには、この故事として資料に出てくる「裁かれて東方に追放される」イメージには、エデンの園から追放されたアダムとエバの物語をも髣髴とさせるものがある。

母は、この帰って来なかった子のために、帰るはずのない子のために、それでも帰って来ることができるようにと橋を修復した。この橋がまさに母の真実な愛の心の表れであったとすれば、人間が神の所に帰って来るようにと、神もまた真実な愛の心を表わす橋を作った。その橋とはイエス・キリストの十字架である。アダムとエバが罪のゆえに裁かれ追放されたその所に、神のもとに戻ることが出来るように橋を作った。そしてこの熱田の母が再建した橋が「截断橋」と呼ばれているように、イエス・キリストもまた人間によってその身と命を断ち切られたのである。しかし断ち切られたことによって完成した橋でもある。

この金助の母のような、子の帰還を待つ親の心は、『海嶺』全体では、遭難した者たちの帰還を願う家族の心にも重なる。「己が家」の章では、久吉が無断で出掛けて行った御蔭参りから帰って来たときに、父又平が裸足で土間に降りて「久吉を抱きしめ、不意に号泣した」とあるが、この放蕩息子の帰りを待ち望む親の愛と姿は神の愛をも現すものとして、ルカの福音書十五章の有名な「放蕩息子」の箇所を下敷きにして書かれている。三浦綾子は『ひつじが丘』や『夕あり朝あり』、『ちいろば先生物語』のそれぞれの主人公の父親たち（広野耕介、船崎資郎・榎本通）の姿の中にも同じものを繰り返し描いている。

また、戦いで犠牲になった息子が母に橋を架けさせるという観点から見ると、

この堀尾金助の母は『母』の小林多喜二の母セキの原型ともなっている。この擬宝珠に刻まれた碑文は現地調査及び前出の文献により確認したところ、終り近くでわずかに「後の世のまた後まで」を「後の世のまた後の世まで」とし、「念仏申し給えや」を「念仏し給えや」と書き換えているが大きな変更はなく、作家が原文を尊重していることが判るが、それは『母』の最終部に出てくるセキの詩が原文のまま尊重されているのと等しく、そこに母というものの真実の心を作家が見ているからであろう。

しかしいずれにせよ、その橋を築かせたものは、子を思う真実な親の愛の心であった。それゆえに、孤独な思いになると、岩松は子供の頃から、よくここへ来たのである。占い師竹軒が文字を教えこの碑文を読ませたように、岩松にとって文字は人間の真実な心を求める最大の手段であった。真実な心に出会う方途は言葉（文字）にある。この文字と言葉の問題に関しては翻訳の問題と併せつつ「『海嶺』論Ⅲ」で考察する。

三　日本人の信仰　―もうひとつの漂流

三浦綾子は宝順丸の水夫たちを通して、日本人の信仰の有様を捉えている。

ああ、伊勢大神宮の大神、願わくは御告げの如く五十日にして、一同をその故里に帰させ給え。吾が命は捧ぐるに惜しからねど、親や妻子の待つその故里に、水主一同を何卒無事に帰させ候らえ。南無船玉様、金毘羅大権現様、御先祖様、八幡様、お諏訪様、富供神社様、お大師様、薬師如来様、何卒この祈りを聞き上げ給え。（「重右衛門日記」）

事の決定に迷う時、船乗りたちはみくじを引いた。みくじに出た答えに従えば、反対者も納得したのだ。それほどに船乗りたちは、みくじの答えを絶対と信じていた。（略）

重右衛門は神棚の戸をあけ、中から御幣を取り出すと、右に左にふりながら、一心に祈った。仁右衛門も岩松も、勝五郎も、その赤銅色の手を合わせて一心に祈る。音吉もみんなにならって祈りつづけた。神の前に祈るということが、こんなにも必死なことかと、音吉は初めて知った。念じているうちに、音吉は何か安らぎの湧いてくる思いがした。（「怒涛」）

船玉様、金毘羅大権現様は船と航海の神、八幡様、お諏訪様、富供神社様は現在も小野浦地区にある地元の神社の神である。「みくじ」のことを含め、これらに関する詳細な知識を作家は『野間町史』[注7]や『船　ものと人間の文化史1』[注8]等の資料によっている。

船人たちはいつも命の危険と隣り合わせであるゆえに、様々な神々を信仰し、数打てば当る風に、それらに祈るのでもあるのだが、それは単なる習慣や文化的習俗的なものではなく、神からの答えには命がけで絶対服従しようとする強い信仰心もあることを作家は描いている。一心に心を合わせて祈る姿勢と祈りの共同体、必死な祈りの中に与えられる安らぎも知っている。日本人の信仰の限界も描きながら、しかしその中にある日本人の信仰心の真摯さや信仰の普遍的な真理をも描くのである。

しかし、宝順丸の水夫たちのうち助かったのは三人だけであった。音吉は「(こんなにたくさん神さんや仏さんがいるのに……)」と思いひどく虚しくなる。「助かりたくて祈った」者たちが「甲斐もなく、次々と」死んだことはショックであった。「わしは神さんや仏さんほど酷い者はないと思うで。こんなに一心不乱に祈った者の命を、みんな奪ってしもうた」という久吉の言葉は偽らざる思いであった。一旦堰を切って流れ出した疑念は次々と信じていたものをなぎ倒し、根本から問うてゆかずにはいない。

「ふーん、お前まだ船玉さまを信じているんやな。お琴の髪の毛が入っているでな。だけど船玉さまって一体何や。人間の髪の毛に、そんな大きな力があるんか」（略）

「久吉、もしかしたらなあ、もっと力ある情け深い神さんがいるかも知れ

せんで。その神さんの名前を、書かんかったで怒っとるのとちがうか」（略）

「（略）ほんとうに力があって、ほんとうに情け深いんなら、頼まんでも助けてくれる筈やないか」（略）

（ほんとに、神も仏もないんやろか）　（「鴎」）

『海嶺』の物語ではしばしば三人の間でなされる対話と議論によって、国家や文化、神や信仰についての認識が深められてゆくという型がある。ここでは祈りが答えられないことを通して、むしろ自分たちの信仰の根元に帰って神について考え始め、真の神を求め、神により近くなって行くのである。難破した船の残骸を突きつけられ、闇雲にご利益を期待する信仰から滑り落ちて一種のニヒリズムに陥ることは必要なことでもある。

それゆえ船がフラッタリー岬に漂着し漂流を終えた時、もう一つの魂の漂流の方はむしろ始まったばかりであった。

四、買い戻し

―愛による回復　そして　様々な人間を通してキリストは近づく

かくして漂流した者は、敗戦後の堀田綾子がそうであったように、他者である誰かの愛の眼差しによってしか、愛に基づいた贖いによってしか、人間として回復されることはない。まさに、「高潮によって打ち上げられる海藻も流木も、そして今朝打ち上げられた岩松たちも、マカハ族にとってはすべて同じ『物』であった。（「フラッタリー岬」）」とある通り、奴隷とされた彼らはそこでは「物」あり「道具」でしかなかった。その証拠に、三人を助けに来たマクネイル船長に対して、酋長は言った。「オトはわしの貴重な財産だ。いや、宝だ。誰にも渡すわけにはいかん。」しかし、「酋長、あのオトのために、わたしたちはどんな代価を払ってもいい、この間も言ったように、三人の救出に、全力を尽くせとマクラフリン博士から厳命を受けている」と船長も喰い下がった。

久吉は地にしがみつくようにして

「音―っ！」

と、またも叫ぶ。マクネイル船長がその大きな手で目尻を拭いた。

（略）鋭く叫ぶ女の声がした。思わず人々はそのほうを見た。それは、アー・ダンクの妻ヘイ・アイブだった。（略）

「酋長！　わたしは、もう一度アー・ダンクのもとに帰ります。もしこのオトを、一緒に帰して上げるなら」　（「二本マスト」）

この救いの体験は三人にとっては決定的に重要なものであった。愛は物を人へと引き上げる力を持つ。「愛は生命の飛躍であり、永遠の生の前兆でもある」とはポール・アザールの言葉であったろうか。愛によって、ことに犠牲を伴う愛によって、彼らは奴隷であることから贖われたのである。マクラフリン博士の「どんな代価を払ってもいい」という姿勢は決定的に重要である。決して見捨てず、「買い戻してくれる者」がいるという根源的な経験を彼らはしたのである。物語の最終部で岩吉は「お上がわしらを捨てても……決して捨てぬ者がいるのや」と呟き、それを聞いた音吉は「（ほんとや、ハドソンベイ・カンパニーのドクター・マクラフリンのようにわしらを買い取って、救い出してくれるお方がいるのやな）（「ああ祖国」）」と心にはっきりと思う。この身体の贖いの経験は、更なる苦難を経て、魂の贖いの経験へと止揚してゆく原型となるのである。

しかし彼らが完全に贖われ救い出されるためにはもうひとつの犠牲、一人の人が自分の身を差し出すという犠牲が必要であった。マクラフリン博士の命でマクネイルが多くの代価を払って買い取ったことは『にっぽん音吉漂流記』[注9]ほか幾つかの宝順丸漂流関係の資料によっても知られる事実である。しかしヘイ・アイブが犠牲を払うのは三浦綾子の創作であり、ここに救いについての作家の考えがある。ヘイ・アイブはやがて三人が出会ってゆくキリストの似姿である。

キリストの姿はまた別の姿を通しても現れ、訪れてくる。フォートバンクーバーのスクール・チャーチで人形劇を見て以来、岩松は羊のやさしい目を見るたびに、「谷底に迷いこんだ羊を助けるために、険しい崖を降りて行ったジー

ザス・クライストという男の姿（「イーグル号」）を思い出すようになる。彼ら自身が祖国の側から見れば失われた存在であったゆえに、それを探し出さんと谷底へ下りてゆく「ジーザス・クライスト」は待ち望むべき人格として彼らの心に刻まれていった。

ミスター・グリーンやドクター・マクラフリン、フォートバンクーバーの子どもたち、サンドイッチ諸島で会った「パーソンやご新造だって、神さんか仏さんみたいな人やった。あんな人たちの信じている神さんが、悪いわけはあらせん。逆さ磔や、縛り首にならねばならんほど、悪いものとは何としても思えんでな（「椰子の木の下」）」と、多くのキリスト者がキリストを彼らに示し、彼らのキリシタン観を揺さぶってゆくのだが、ロンドンまで乗船したイーグル号の荒くれ男たちの世界にもキリストの姿は描かれる。老水夫は息子同様の若い水夫に「サム……俺はなあ、お前のためなら、鞭打たれたって、かまわないんだぜ」と言い、サムは「親父、ありがとう。俺のために鞭打たれてもかまわないってえ人間が、一人でもいる。それで俺は充分さ（「椰子の木の下」）」と応える。

五、歴史を支配し、人格的に一対一で関わってくる唯一の神への道程

この漂流民たちがその旅の最も遠い所、ロンドンの町で最後に見たもの、それはハドソン湾会社玄関の上の、後足立ちになって向かい合った二頭の鹿の見事な彫刻と、その「二頭の鹿の間に彫られてあった十字（「霧の都」）」であった。それは何が彼らを奴隷状態から購い出したか、ドクター・マクラフリンを動かしていたその本体を明らかにしていた。彼らはそこに『氷点』の表現で言えば「大いなる者の意志」を垣間見るのである。

インド洋で、竜巻に遭遇し「（一里程前を走っていた船がまき上げられ、この船が助かった）」ことに対して、「なぜ前の船がまき上げられ、この船が助かったのか。岩吉にはそれがひどく厳粛な事実に思われた。木片を見つめる岩吉の目に深い畏れの色があった。（「奴隷海岸」）」とあるが、「畏れ」は深い知恵を持って一切を支配し、計画を持って個人的にも迫ってくる大いなる存在を感得するところに起る感情であり、感情である以上に拝跪を促されるような内的な衝迫の経験である。それはやがて具体的な計画と働きのうちに一人一人を召し出すことになる。彼らの場合それは聖書の日本語訳作業に協力するということであった。

「ほんとやな、音。わしら、バイブルを日本語になおすの、手伝いたくないと思うているけどな、キリシタンの神さまから、逃げられせん言われたみたいな気がするな」

「うん。きっと逃げられせんわ。キリシタンの神さまって、この世界を造った神さまやいうで、どこまで逃げても、役目が終わらんうちは、追っかけて来るかも知れせん」

（「ロゴス」）

岩吉が「（不思議な目だ）」と感じる、日本への深い愛に満たされたギュツラフのまなざし。それは、「いまだかつて覚えたことのないほどに、心にひびくまなざし（「マカオの空」）」であった。岩吉はその目によって「ギュツラフに深い信頼感を持った」。三人はこの目に信頼してキリシタンのお経を訳す手伝いという恐ろしい仕事に身を捧げることになる。ここで岩吉たちはそのまなざしの体験を通して、天地を造り世界の一切を支配している存在を畏れるという段階から、生かされていることのうちに神の側の意味と目的があることを思い、唯一の、深い考えを持つ「カシコイモノ」たる神が、信頼に足る大いなる人格的存在として顕われ始めるのである。

「そうやなあ、舵取りさん。ほんものいうのは一つやなあ。ほんものの神さまに頭を下げんで、ほかのほうにばかり頭下げてたら、こりゃ一大事だな」（略）／「ほんとやな、ご新造がな、自分の亭主をそっちのけにして、ほかの男に愛想ようしたら、こりゃことだわな、音」（略）／「とにかくな、あれもこれもというのは、ほんとの信心とは言えせんような気がする。あれでもこれでもはいかんのや。ほんとの信心はあれか、これかでな

ければならんのや。きっとな」　（「ロゴス」）

「（略）憎むこと、ねたむこと、人の妻ほしいこと、これ罪です。殺すこと、ぬすむこと、これ罪です。けれども、ジーザス・クライストが、わたしたちの罪をかぶります。全部かぶります。わたしたち安心です」／そう言った時、寿三郎が大声で言った。／「そぎゃんこつ……人の罪をかぶる……そぎゃんこつ、信じられんとです！」／その時、音吉は思わず、心の中に叫んだ。

（なぜ、信じられせん⁉　ジーザス・クライストは、ほんとに罪をかぶってくれたんや）

音吉はそう思って、思わずはっとした。　（「合流」）

唯一神の観念や「あれか、これか」という信仰のあり方、十字架による贖罪など、キリスト教の重要な考え方が漂流民たちの語り合う言葉と心によって示されてゆくのだが、まさにそれらは漂流民の言葉によって感得され、語られなければならなかった。それがこのキリスト教作家の福音理解の要であった。

この章は「合流」と題されていて、天草組の四人が合流した章なのだが、それはキリストの贖いの流れ、キリストの命の流れの中に音吉たちの人生の流れが巻き込まれ合流してゆく地点でもあったのである。

六、砲撃と十字架　―捨てぬ者の発見

「祖国に捨てられた耐え切れぬ淋しさ（「ああ祖国」）」と号泣の中で、しかしその中でこそ漂流民らは出会うべき者に出会ってゆく。

この最終部には福音書のイエスの受難に関わる記事との幾つかの符合がある。

最後の晩餐を思わせる浦賀沖での日本人とのパンと葡萄酒での交わり。薩摩藩の役人による取調べでは、役人は彼ら漂流民に罪を見出さなかったが、それはポンテオ・ピラトによるイエスの尋問と近似する。そして長くつらい最後の日、「暗闇があたりを覆った」とある。『天保八年米船モリソン号渡来の研究』にはキングやウイリアムズの日誌を資料とした気象の記述があり天候などは事実の通りであるが、この暗闇の表現はマタイ、マルコ、ルカの共観福音書のイエスの死の記事の部分に見られる「全地が暗くなった」に符合する。

「（……わしは、生みの親にさえ捨てられた。今度は国にさえ捨てられた）」という思いの中、岩吉の心に「お絹の白い横顔、走りまわる岩太郎の姿」が浮かんで消え、それから「自分を拾って育ててくれた養父母のやさしい顔が大きく浮かんだ。」この養父母の顔の奥から、かつて熱田の截断橋で竹軒が指さした「真実な心」が今「消して捨てぬ者」として現われ、岩吉の心を捕らえるのである。

やや経ってから、岩吉はぽつりと言った。

「……そうか。お上がわしらを捨てても……決して捨てぬ者がいるのや」

その言葉に音吉は、はっとした。

（ほんとや、ハドソンベイ・カンパニーのドクター・マクラフリンのようにわしらを買い取って、救い出してくれるお方がいるのやな）

音吉は、今岩吉が何を言おうとしているかわかったような気がした。砲火を吐きつづける暗闇を見つめながら、／（みんな……みんな……もうわしらのような目には、あわんようになあーっ）と、心の中に祈った。大砲は尚も、遥かに遠ざかったモリソン号を威嚇するように、赤い火を噴きつづけていた。　（「ああ祖国」）

怒りや恨みの言葉でなく音吉が祈った「（みんな……みんな……もうわしらのような目には、あわんようになあーっ）」という言葉は、自分を砲撃する国の人間のための祈りである点で、イエスが十字架上で祈った「父よ、彼らをお許しください、彼らは何をしているのか自分で分らないのです。」という祈りに似ている。それは自分を十字架につけた者のために祈る祈りである。そして十字架によって神の国への入口が開かれるように、この漂流民たちの犠牲が

あってやがて開国がなされることになる。

モリソン号と日本の関係はイエスと人間の関係に近似している。「この方はご自分の国に来られたのに、この国の民はこの方を受け容れなかった。」とヨハネの福音書一章一一節にあるとおりである。イエスは捨てられて「エリ・エリ・ラマ・サバクタニ」（我が神、我が神、どうして私をお見捨てになったのですか）と叫ぶが、そこにこそ彼を殺した者達の救いの道が開かれてゆくのである。

「黒々とした日本の国土」の無気味さは『氷点』冒頭に書かれた見本林の黒々とした影が地に蠢く様から連脈する罪の表象であるが、「砲火を吐きつづける暗闇」、この砲声はイエスを「十字架につけよ」と要求する声であり、イエスを罵る声でもある。

七、後記の意味　―ゆるしについて

この作品には少し長めの「創作後記」があり、七人の漂流民のその後の人生などが書かれている。七人のうち後に最も有名になったのは音吉である。彼はこの後すぐにモリソン号でアメリカに渡って商船や軍艦で働き、上海などでイギリスの商会の高級社員として活躍し、ペリー来航四年前の一八四九年、イギリス軍艦マリーナ号の通訳として来日した。五年後イギリス東印度支那艦隊司令官スターリングが長崎に来て日英和親条約が締結された時の通訳も音吉であった。この時音吉は熱田の港を出て以来、初めて日本の土を踏んだ。これは推測に過ぎないが、スターリング司令官の通訳音吉の中には、自分たちを砲撃した日本という国に対する睥睨のまなざしと、しかしその底には癒しがたい祖国への愛ゆえの傷があったのではないだろうか。

四〇年余り後の一八九七年（明治一二年）六月一八日の「東京日日新聞」に、一つの記事が出た。「尾州知多郡の産にして、四〇年前に亜墨利加へ漂流した山本乙吉の子」ジョン・ダブリュー・オトソンという者が帰朝して神奈川県へ入籍を願い出た。それによれば音吉は一八六三年にシンガポールに移りそこで亡くなったが、乙吉は息子を日本籍に入れるのが願であったとのことである。作家はここまで書いて「この入籍願が受理された形跡がないのが残念である」としているが、現美浜町にある音吉の妹の子孫が経営する旅館山本屋に所蔵されている資料によれば、このオトソンは入籍を果していることが判る。

それはともかく、この後記に隠されている問題の一つは「ゆるし」である。

人は自分を攻撃して来た存在に対しては、たとえ心に赦す決心をしても、その人を自ら訪ねることは中々できないものであるが、「ゆるす」ことは、愛が裏切られて、場合によっては悪意を以て遇されて、しかしにもかかわらずその相手のところへもう一度戻ることではっきり表わされる。自ら戻るか、あるいは自らの最も愛する子をその相手の所へ送ることである。

創世記では神は人間と一緒に暮らしていた。エデンの園の中を歩く神の姿が記されている。しかし、人は神の言葉を無視することで神を退けた。自分が神となるために。自分の欲望を神とするために。それはすべての人間が自らの心に自覚するところである。神は愛に傷ついた。しかし、神は怒りを以て臨む代わりに、自ら人間の国に人となって来た。受け入れられることのない国に。自分が殺されることになる国に。だから神が人となったことそのものに、既に大きなゆるしがある。そしてイエス・キリストも復活をもってゆるしを証明し、自分を裏切った弟子たちを自ら再び訪れ、更には自分を殺したこの世界にもう一度来ることを約束する。このように「創作後記」は福音書の受肉および復活の記事と重ねられて書かれていると考えられる。

注

1・『岩吉久吉乙吉頌徳記念碑由来記』山本豊治郎・一九六二年七月
2・相原良一・一九五四年一一月・野人社
3・『山口國文』第二九号・二〇〇六年三月
4・名古屋市熱田伝馬二丁目にある。
5・姥堂裁断橋保存会、堀尾遺跡顕彰会編発行・一九七六年二月
6・名古屋市文化財調査保存委員会・一九六二年九月・名古屋市経済局貿易観光課発行
7・一九五五年三月・野間町・現在野間は美浜町の一部となっている。
8・須藤利一・一九六八年七月・法政大学出版局
9・春名徹・一九七八年五月・晶文社